

四国こどもとおとなの医療センター
児童精神科成育こころの診療部長
中土井芳弘氏

香川の医療最前線

645



新型コロナウイルス禍を契機に増加し、高止まりが続いている子どもの摂食障害。特にやせ願望が強くなる「神経性やせ症」は、コロナ前と比べるとおよそ1・6倍の水準との調査結果もある。四国こどもとおとなの医療センター児童精神科の中土井芳弘成育こころの診療部長に、子どもの摂食障害の現状や治療について聞いた。

摂食障害は大きく分けて神経性やせ症、神経性過食症、過食性障害、回避制限性食物摂取症の四つがある

が、子どもの場合は大半が神経性やせ症と回避制限性食物摂取症。ほぼ7割を神経性やせ症が占める。神経性やせ症とは、

子どもの摂食障害

脳の萎縮や心機能の低下、低身長、骨粗しょう症などの影響が起る。生理が来なくなることも。判断力が低下し、ますます正常な考えに悪影響が出る。

特に神経性やせ症は、

神経性やせ症が増加傾向

コロナ後も危険性続く

ダイエットなどをきっかけに極端に食事制限をした

えがでなくなると、

り、反動で過食して嘔吐したりして、明らかにやせた

最近になって摂食障害に

状態になっているのに、それを異常と感じていない

発達障害と関係があることも

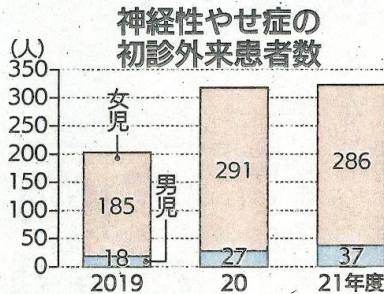
気だ。飢餓状態になると、

また人との接触が遮断さ

言われている。神経性やせ

また人との接触が遮断さ

加が顕著という。当病院でも増加傾向だ。生活環境の変化によるストレスや、新卒の感染症への不安が背景にあるだろう。



国立成育医療研究センター調べ(有効回答数24医療機関・25診療科)

なかに、よしひろ 2001年徳島大医学部卒。同大病院香川小児病院などを経て、22年4月から現職。精神保健指定医、日本精神神経学会専門医・指導医、日本児童青年精神医学会認定医。岡山市出身。47歳。

れ、自分の体に過度に関心が向いてしまったのもありそう。盛んになった交流サイト(SNS)で、顔の加工アプリが一般的になっているように、自分の容姿が一段と気になるようになったのではないかと。どんな治療を進めていくことに。

含めて正しく知ってもらい、うまく食べられるように支援していく。改善が見られない場合は、入院治療となる。
— コロナの5類移行で日常生活が戻りつつあるが、5類に移行しても、自分に自信がなくマスクを外せない子がいるように、自分がどう思われるか不安な気持ちが残る。またSNSは変わらぬ多くの子どもが利用する。そういう意味で、病気になる危険性は続いていくだろう。

■ 四国こどもとおとなの医療センター児童精神科

医師5人が在籍。現在、受診者の増加により初診予約が数カ月待ちとなっているが、緊急を要する場合は別枠で対応している。

所在地：善通寺市仙遊町2-1-1
電話：0877(62)1000
https://shikoku-mc.hosp.go.jp/section/c_mantalth.html